

はなしじゅうりょう

ふくいけんふくいし おはなし

# 「話 十 両」

福井県福井市のお話

昔、ある男が江戸へ米つきにいきましたと。一生けんめい元気に働いたので、お金が三十両たまりました。ずうつと昔のことですから、そのころの大金でありました。

それでせっかく江戸へ来たのだから、何か珍らしいものをみやげに買って帰ろうと思いました。三十両を胴巻きに入れて、江戸の町をあちらこちら、ぶらぶら見て歩きました。するとある家の前に、

## 『話 十 両』

という看板が出ていました。品物売る店はたくさんあるけれど、話を売るとは珍らしいことだと思いました。

店にはいり、

「話を一つ売ってもらいたい。」

といますと、店のものが、

「話一つ十両だが、お金を持ってるかね。」

と念をおしました。

それでいわれた通り、十両渡すと、店のものは、

「大木の下によってはいけない。」

といました。

話が余りに短いので、もの足らぬ気がして、男は、

「もう一つ売ってもらいたい。」

といいますと、前と同じように店のものは、

「ではもう十両出してもらおう。」

といったので、いう通りにまた十両渡しました。今度は、

「ねこなで声には、ゆだんするな。」

といました。これもまた短かったので、男はまた、

「もう一つ売ってもらいたい。」

と頼み、最後まで持っていた、残りの十両を渡しますと、

「短気は損気。」

と、前のよりももっと短い話を売ってくれました。

男はもっと長くて良い話を買えると思っていたのに、こんな短い

話だけを三つも買って、当てがはずれました。せつかく骨を折って働

いてためた三十両を、こんなことで使ってしまったのをくやしがりまし

たが、今さらどうにもなりません。仕方なくさびしい思いをしなが

ら、とぼとぼと国の方へ帰って来ました。

途中、野原のまん中で、にわか雨にあいました。幸い近くに大きな木があったので、急いでその下へかけこみ、雨宿りをしました。

その時ひよつと、

「大木の下によつてはいけない。」

という、最初に買った話を思い出したので、あわてて木の下を離れま  
した。するとそのとたんに雷が大木の上でゴロゴロゴロツ、ピカリ、  
ドシャンと落ちて、大木がま二つにさけました。

そこで男は、

「ああ、危いところだった。あの話は十両で安かつたわい。」  
と思いました。

雨があがったので、また歩きました。そのうちに日が暮れて、あた  
りがまっくらやみになりました。どこかに泊まらなくてはと思つて見  
まわすと、遠くの方にチラリともし火が見えました。そこへいき、  
一晩泊めてほしいと頼みました。中から女のひとがひとり出て来ま  
して、ねこなで声を出して、

「さあさあ、お泊まり下さいな。」

といつて、すぐに奥の座しきへ案内してくれました。

夜がふけたので寝床をとってもらい、その中にはいったとたんに、  
二番目に買った話の、

「ねこなで声にはゆだんするな。」

という話を思い出しました。

それでぐるりを注意して見まわすと、天井から大きな石が下げ  
てあり、寝ると頭の上ですぐ落ちるようになっていました。男は、こ  
れはたいへんだわいと思ひ、ソウッと起きて裏口から一もくさんに逃  
げていきました。そして、

「ああ、危ないところだった。あの話は十両とは安かったわい。」

といいながら、胸をなでおろしました。

そのあと何日かかかって、ようやく自分の家に帰り着きました。

「やれやれ、何といってもわが家は安全。」

と思つて、中へはいろうとし、ふと見ますと、障子に自分の女房と  
見知らぬ男の影が二つつつています。男は、

「さては、自分の留守の間に、女房が他の男と仲良くなつたんだ  
な。」

とたいへん腹が立ちました。

刀を抜いて、家の中へとびこもうとしましたが、そのとき、

「短気は損気。」

という三番目に買った話を思い出しました。

それで心を静め、落ちつきはらって、

「今帰つただ。」

と呼びかけながら、家の中へはいりました。すると女房が喜んで  
出迎えてくれました。

男は、

「今お前と一しよにいた男はだれだい。」

と聞きました。女房は笑いながら

「あれはあんたの留守の間、女だけの暮しは不用心だと思い、

お母さんに髪を切つて男の姿をしてもらっているのですよ。」

といました。よく見ると母が、ザンギリ頭で女房とならんでいま

した。男は、

「ああ、もう少しのことで危いことになるのだった。あの話が

十両では安かったわい。」

と思つて、非常に喜びましたと。

そうらい、めつたり、はいのくそ。